

## 大谷大学図書館のこと

—図書館員の皆さんに捧ぐ—

学長・教授 木村 宣彰  
(仏教学)

本学の図書館は、東本願寺の高倉学寮に付属する〈大谷文庫〉がその濫觴である。それゆえ、1901年(明治34年)に真宗大学として開学して以来、単科大学の図書館としては蔵書の質と量とにおいて国内有数であった。ところが、1922年(大正11年)に「大学令」によって大学(旧制)として認可をうける際に一つの難点があった。貴重な図書は数多いが、それを収蔵する施設が余りにもお粗末であることが指摘されたのである。私が学生の頃、ある先生が「校舎はボロでも人は育つ」と仰せになっていたのには、実はこのようなことが念頭にあったようである。

このような事情もあり本学関係者は誰もが図書館の新築を願っていたが、1961年(昭和36年)の親鸞聖人七百回御遠忌を機縁として俄にその気運が沸き起こった。その時に本学名誉教授の鈴木大拙先生は「太平洋戦争末期にウォーナー博士が、爆撃から除外されるべきものとして、米国大統領に進言した文化財の中でも、特に貴重なものとして、大谷大学の図書館が指摘されている」と語られた。アメリカの東洋美術研究家ウォーナー博士は、第二次世界大戦中に京都や奈良にある貴重な文化財を米軍の空爆から守るために尽力されたことでよく知られている。博士は、戦禍から護らねばならない貴重な文化財を厳選した「リスト」を作成した。その「ウォーナー・リスト」の中に本学図書館が挙っている。鈴木大拙先生はこのことを紹介して新図書館の必要性を強調されたのである。

本学にとって積年の悲願であった図書館新築のために在學生や教職員が一丸となって募



金活動を開始した。設置者である宗派から多大の援助を得たことは言うまでもないが、学の内外から有縁の方々のお力添えがあった。その中でも特筆すべきは、インド初代大統領から高額な寄金が寄せられたことである。インドのプラサード大統領は、本学の事情を知ってメッセージを寄せられた。大統領は、本学の永年にわたる教育・研究を評価して「インドの思想文化に対する変わることなき熱意に対するインドからの感謝のしるし」と述べ、本学図書館の蔵書を「貴重な集積の保存を保証させるため」に大変に高額な寄付をされたのである。在日インド大使館を通じて大統領のメッセージが本学に届いたのは、1959年9月24日であった。

それから3年後の1962年4月、私は本学文学部に入学した。図書館(現・至誠館)が開館した記念すべき年であった。当時、日本で唯一図書館建築について研究していた東京大学の吉武泰水教授の研究室がその構造設計を担当した。数多くの貴重な図書や文献を所蔵する本学図書館の特色を何よりも第一に考えて閉架式の図書館となった。

大学図書館における蔵書構成は、その大学



本学旧講堂で講演中のプラサード大統領  
(1958年9月30日)

の建学の精神や学問を端的に示すものでなくてはならない。正しく本学図書館の蔵書は、建学の精神と学問の伝統を背景にして構成されているが、それを公開するには「図書目録」を完備しなくてはならない。本学は他の大学に先駆けて「目録」を完成し、広く公開した。このことは、大いに誇ってもよいことである。閉架式の書庫は、利用者にとっては不便であり、時代遅れのように考えられているが、貴重な図書や資料を保管するには開架式とは比べものにならないほど優れている。そのような閉架式を採用するには「図書目録」と優れた素養の「図書館員」が不可欠である。旧図書館には、独自の「図書構成」と完璧な「図書目録」と有能な「図書館員」があたかも三位一体の形で完備していたのである。

私が学生の頃には「図書目録」を〈読む〉ことが研究の入口であった。専攻する学問体系の全体を理解するには何よりも「図書目録」を〈読む〉のが一番の近道である。当時は、図書目録によって借り出そうとする図書の請求番号と書名を用紙に記入して出納の担当者に願い出るシステムであった。

ある時、図書館の方に閉架書庫から必要な図書の借り出しをお願いしたところ、依頼した図書と共に、更に別の図書を提示されたことがあった。その図書館員から「この本を読むなら、併せてこれも読まなくてはならな

い」と懇切なアドバイスを受けた。若造の学生がどの程度のレベルかをよく知り、次に学ぶべき図書を教えていただいたのである。その図書を読んでみると「なるほど、この本はどうしても読まなくてはならない」と納得させられるのである。このようなことは二度三度ではなく、幾度となく経験した。図書館の充実発展に大いに寄与された高橋正隆先生の近著『善慶納閑話』にも同様のことが記されている。

私は本学で40数年を過ごしてきた。学生、研究室員、教員、そして図書館長など大学の執行部の時期を、それぞれほぼ十年ずつ過ごしてきた。私の本学におけるこの〈四季〉において図書館から受けた恩恵は計り知れないものがある。その間には未整理図書委員を仰せつかり、出勤簿に印を押しながら毎週図書館に通い、甚だ貴重な線装本を手に取り、文字通り書香を聞きながら未整理であった林山文庫の目録を作ったりもした。私の図書館の思い出は多いが、既に紙幅は尽きた。

現在では、閉架式から開架式へ、図書目録からパソコン検索へと変化した。しかしながら目に見えない伝統は脈々と響流館に受け継がれている。図書館の隅々まで建学の精神が生きており、今も図書館員の誇りをもった仕事振りを見て大変に嬉しく思い、わが愛する大谷大学図書館に感謝しつつ、この一文を認めた。

(2008年9月24日、プラサード大統領の願いに思いを寄せて記す)